

文化高知

2008年11月 NO.146



「白光浴」 越智明美

〈もくじ〉

高知へ来たらみんな高知人	林田周一	2
『高知県人海外発展史』編纂のすすめ	中村茂生	3
夢の途中 - 命あることに感謝	寺本英彦	4~5
〈子どもと四万十川に橋を架ける〉	門田雅人	6~7
高知県の課題——社会経済の側面から考える(3)	福田善乙	8~9
言葉の現場から⑫ 高知の若者が発するロック iii	OK電算機	10
高知のギャラリー⑧ タマリン館	玉造義隆・久美	11
9月~10月の事業から		12~13
風俗歳時記・風伯		14~15

平成十九年四月一日高知駅に着任。六年前に関連会社への出向もあり、高知での勤務は二回目となった。

まさか自分が……。やりがいもあつたが不安の方が強かつたのを覚えている。新駅舎への移転準備、高架開業等、何から手をつけていくか課題は山積だったが、高知のすばらしい仲間たちに出会いなんとか順調に出発できた。

「高知へ来た以上高知人より高知人になつちやる」と心に決め土佐弁も勉強。もともと高知の熱い、温かい人情が大好きで、自分の性格にすぐにマッチし、そのうえに酒のパワーもあつて、すべてが高知人に近づいてきた。そうなると思つたものがあり、不安であつたことがだんだんと消えていった。

平成二十年二月二十六日の新高知駅開業に向けて、スタッフ全員が同じ方向を向き目標の共有化も図られてきた。「二月二十五日」、旧高知駅においての最終列車を全員で見送ることができた。数時間後には新駅開業のため、感慨に浸っている時間もなく、残っている移転準備に取りかかった。

そして「二月二十六日」。三代目高知駅開業。朝一番の列車が出発した時は工事関係者ら全員が自然にバンザイ三唱となり、気がつくとお客様も一緒に喜んでいてバンザイの大合唱となつた。開業式典には県知事をはじめ県・市・工事関係者、地元自治会など多くの方が出席され、

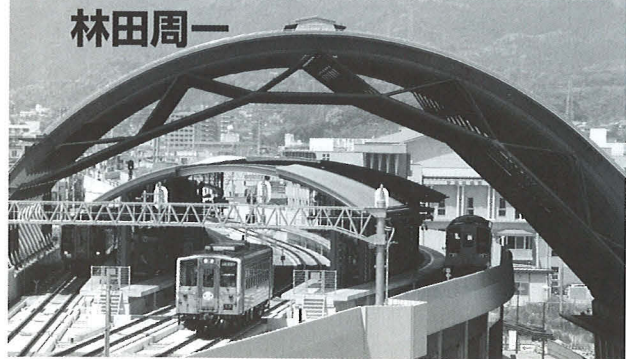
堂々のデビューとなつた。それにも増してたくさんのお客様が高知駅を見学に来られ、感動していただいたことが一番の喜びであつた。駅はみんなの駅、そしてその代表として自分たちが守っていく、という気持ちで忘れることなく明るく元気な駅にしていこうとあらためて思つた。

新駅効果としては、南北通路の利便性、ロングレールを使用した騒音振動対策、愛宕、入明踏切等十一カ所の踏切が撤去され朝夕のラッシュ時における渋滞の緩和があげられる。また駅南側整備とともに、来年には土電も北へ延伸し利便性の向上が図られる。

駅前広場とプラットフォームをすっぽり覆う大屋根（くじらドーム）は、高知県産の杉を用いた全国的にも初めての形態であり、明治維新を切り開いた土佐の風土・精神の象徴であり高知駅のシンボルとなつている。このたび、高知駅が平成二十年日本鉄道賞のラインドマークデザイン賞を受賞し、全国からも注目

高知へ来たらみんな高知人

林田周一



新しい高知駅の大屋根（愛称くじらドーム）

新高知駅北口



を浴びている。また、駅施設においてもエレベーター、エスカレーター等バリアフリー設備を充実させ、利用者の利便が考えられている。

現在、県内全域で「花・人・土佐であい博」が開催されている。JR四国としても高知全体が少しでも活性化できるよう、四国内における広報、誘客を中心に全力をあげて協力していくつもりである。

また、平成二十二年には、NHK大河ドラマ『龍馬伝』が放映されることになっており、ますます坂本龍馬や高知県に対する注目度が高まってくることも当然予想される。高知駅が情報発信の大きな役割を果たす

ものと認識し、各地域と連携をとりながら、高知へのお客様の誘致など県内観光発展のための一翼を担えたいと考えている。

高知は自然も素晴らしく、県外の方にPRしていく情報はたくさんある。そのいろいろな情報のなかで私が一番発信したいのは、「土佐人の熱い心・温かい人情」なのです。自慢したいし、伝えていこうと思う。

高知へ来たらみんな高知人！ 大好きな高知をみんなで盛り上げていこう！

（はやしだしゅういち／四国旅客鉄道株式会社高知駅長）

『高知県人海外発展史』

編纂の
すすめ

中村茂生



ブラジル日本移民百周年記念式典のパレード

ブラジル日本移民百周年の今年、九月までサンパウロで過ごした。百年前に最初の日本移民がブラジルに到着した六月には大きな式典が催され、日本から皇太子や麻生現総理大臣、各県知事から新聞社、テレビ局もはるばるやってきた。現地のテレビ番組や新聞でも連日取り上げられ、ブラジルの人口の1%にしか満たない日系人が、この時期だけはずいぶい脚光を浴び、日系人の商店の並ぶサンパウロ市の東洋街の人出もいつも以上だった。

そんな状況のまっただ中にいたものだから、日本に戻った時、まわりの人の反応が、相変わらず、ブラジル？移民？百周年？？だったことに少しがっかりした。少し、というよりは、まあそんなものだろうという予

感もあつたからだ。

外国と国境を接しない日本は、外国人、異文化と付き合う経験が歴史的にも極端に限られている。いわゆるグローバル化の時代にあつて、今後ますます外国に出なければならぬいし、外国人の受け入れもしなければならぬ時に、その経験不足が障害になりはしないか。ブラジルの移民の歴史は、そんな日本人が近代以降、外国人・異文化と正面から向かい合った稀有な経験であり、そこから学べるものは少なくないはずである。そのためには日本人による歴史研究がもつと盛んに行われるべきだし、まずは移民への関心呼び起こさなければならぬ。こんな思いを、移民史に関する仕事に携わっていた私たちは仲間内で共有していた。し

かしブラジルでの盛り上がりには比べると、日本でのブラジル移民への関心はそれほど高まっていなかったという話は聞こえていた。なんとも残念である。

それでもこれまでにない動きはあつた。私の職場に隣接するサンパウロのブラジル日本移民史料館に寄贈された本のなかに、ほう、と思つた一冊を見つけた。今年の三月に出版された『鳥取県中南米移住史』である。移民を多く送り出している県が、移住史をつくる例はこれまでもある。それはそれぞれ貴重な本ではあるが、基本的に記念誌の性格を持つたものが多い。つまり記述の客観性や実証性といったことにはそれほど重きがおかれず、何年にブラジルに渡った誰れさんが現在どこで成功しています、といった情報が中心となる。

『鳥取県中南米移住史』はそれとは毛色が異なり、日本近代における海外への移民送出という現象とその結果を鳥取県という単位でじっくりと振り返ろうという、相当に充実した「歴史書」である。なるほど。いきなり日本全体に向けて、ブラジル日本移民史に関心を持ってください、が無理でも、こうして地味でもしっかりとした研究が局地的に重ねられ

ばよいわけだ。

さて、そこで高知県である。ブラジルだけに限っても、高知県人の存在は大したものだ。そもそも百年前に最初の移民をブラジルに送つたのは佐川出身の水野龍だ。そのたつた一回の移民事業で会社を潰した水野の事業を引き継ぎ、ブラジル日本移民史のなかで第一回以上に評価もされる竹村殖民公館も高知の移民会社。また日本移民がブラジルにもたらしたのもつとも重要なものが農業分野への貢献であることは広く認められていることだが、その日本移民の農業を支えていた巨大産業組合、コチア産業組合をつくり育てたのも高知県人だ。そして私の見るところ、彼らは皆、紛れもなく「高知県人」だった。

そうした、海外に出た高知県人の活動をきちんととどり、まとめるだけでもひとつの大きな財産になるだろう。これからの高知県人にとつても、たぶん日本人にとつても。

高知県人の移民史があつてもよいかもしれない。タイトルは、例えば『高知県人海外発展史』、というのはどうだろうか？

なかむらしげお／立教大学ラテンアメリカ研究所 研究員

夢の途中

—命あることに感謝—

寺本英彦

その朝は珍しくさわやかな目覚めだった。芸能界の人間はすこぶる朝に弱い。そのことを自慢げにする者さえいる。午前中は仕事にならず、世間の方々とはいままで波長が合わないう。だが、この日はまるつきり違っていた。自分でも別人かと思うくらい、清々しい、何年ぶり?と思う朝だった。

今日は博多まで行く日である。歌手の北島三郎、特別公演。福岡の博多座で一カ月間公演される。そのためのリハーサルが本日から始まる。四日間の稽古、そして初日の幕が開く。自分の仕事はその北島三郎専属バンドのマネージャー兼サックスプレーヤーである。昭和三十七年九月二十日にプロデビューして四十年目の年だった。

その間、自分の都合で仕事に遅刻

や欠場で穴を開けたことは一度もなかった。これは自慢だった。さらに記録の更新中であつた。

高知—福岡便は、一日午前午後二便のみ。そろそろ身支度を、と思

い、立ち上がった。フツと身体力が抜けてイスに座り込んでしまった。そのまま動けない。目が回り、気持ちが悪い。ジツとするしかない。そこへ妻が入って来て顔を見るなり「あなた、どうしたの!」大声をあげている。

なんでもないよ、と言いたいけれど言葉にならない。少しヤバいかなと思ったが、やはりしゃべれない。妻は病院に電話している。「車に乗ってください」「すぐに病院に行きますよ!」

「飛行機に遅れるから行かない」「そんなこと言ってる場合じゃない

いですよ!!」ますます口調が激しくなっている。

危険な状態になっている。自覚はまったくなし。だがこの時、左の膝がムズムズ勝手に動いて止まらない。なんとも不快なものだが、この症状は三カ月ほど前から時々あったのだ。いつもじきに治るのでたいして気にしてなかったのだが、今日は長いな、と思っていた。

日頃から、血圧は高かった。一八〇/一二〇は普通だったが、生活には不自由がなかったので無神経に仕事をしていた。降圧剤は服用しなから、用心もしながら、無理を重ねていた。北島一行のバンドマネージャーとして日本全国、あるいは世界各國の空を飛んでいた。たぐさんの思い出と徳をいただきながらの楽しい仕事だった。喜びの毎日だった。

ストレッチャーに寝かされたまま何か所もの検査室に連れて行かれた。病気で寝込んだことは今まで一度もなかった。腕に点滴の管。点滴もストレッチャーも初めての体験だった。早くすんでほしい。飛行機の朝の便は間に合わなかった。午後の便で今日中に行きたい。気持ちは焦っている。処置が終わる次第出かけるつもりで、手荷物を病院に持ち込んでいた。本日中に博多に行かねば、である。

体を揺すられて目を覚ます。注射で眠っていた。そばにドクターが立って見下ろしていた。いつの間にか病室のベッドに寝かされていた。

医師が「気分はいかがですか」と尋ねた。早く抜け出したいので「なんとありません。今日中に博多に行きたいのです! まだだめですか」

「はい、まだ検査結果が全部出ませんので少し待ってください」「点滴も少なくなってきましたね」と言って病室を出て行った。しめた! 点滴が終われば済みだ、と思ひ込んでしまった。大いに期待した。そこへ二人目の医師が来た。帰れるぞ!

すると、医師が「結果はすぐには出てこないものもあります。いずれにしても今日はこのままじっとしててください」、である。

「ガクッ」なのである。「困るんです。でも、どうしても駄目ならば、四日後の初日には間に合うようにお願い致します」

「わかりました」言い残して室を出て行ってしまった。だんだん不安になってきた。注射のせいなのか臆腫としていた。時計は四時を少し過ぎていた。今ならまだ飛行機に間に合うのにと、あきらめきれない。点滴は満タンの袋に替えられていた。「今日は駄目かあ」ひとりつぶやいた。

三人目の医師が入って来た。「テラモトさん、あなた、飛行機に乗らなくてよかったですよ。命拾いしましたね」「私が親だったら飛行機には乗せてませんよ!」厳しい口調だ。今までの二人の医師とは目つきもだ

いぶ違う。真剣さが伝わってくる。

さすがにのんきな自分も事の重大さが少しづつわかってきた。やはり脳梗塞だった。さらに医師は言った。「手当が早かったのはよかったです。奥さんのおかげですよ」

結局、半月間の入院でさらに精密検査をすることになった。複雑な思いが頭の中で回り始めた。自分の音楽は、まだ中途半端のまま。まだまだ学ぶこともたくさんあるのに今倒れてどうする。第一、オヤジさん(北島三郎)にも申し訳ない。このままでは…。混乱し始めた。

その頃、妻は医師に呼ばれていた。「ご主人の状態はけっして軽くない。良くて車イスの生活か、最悪の場合には寝たきりになるかもしれない。精密検査の結果で手術が必要か結論が出ますが、ご家族は楽観できませんよ」と厳しい状況を聞かされていた。

血圧が安定せず、半月間の検査が過ぎて帰れなかった。どうも手術は免れないようだ。後から入院してきた患者さんが何人も手術を終えて退院していく。自分の場合は右脳の中に梗塞があつて、血管の細いところなので手術が難しいらしい。さすがに心細くなってくる。

九月も終わろうとしていた。博多の劇場もまもなく千秋楽となる。一度行ってきたい。オヤジさん、出演者に逢いたい。少しは気も晴れるかもしれないと思い、医師に相談してみた。すると、一日ぐらいいなら大丈夫

夫ですよと言ってくれた。これは嬉しかった。

九月の末、天気は晴れ、福岡空港に降り立った時、ホツとしたのを覚えていた。劇場の裏口に着き、通用口から楽屋に入る。関係者もスタッフも皆、私の顔を見て、大丈夫ですかと声をかけてくれた。生き返った気がして嬉しくなった。

さっそく、楽屋のオヤジさんのところへ挨拶に。オヤジさんは笑顔で迎えてくれた。たいへんだったな、大丈夫か、無理するなよ、であった。「浴日、おめでとうございます」業界の挨拶をし、「最後の舞台を觀せていただきます」と言って控え室を出た。自分が今日観る席は舞台の袖なのである。関係者以外は立ち入り禁止の場所、一番よく見えるところ。

劇場の長期公演は、お芝居と歌謡ショーの二部構成になっている。歌謡ショーが始まった。自分のバンドを客席側から見るのは初めてのことで、そこに自分がないけれど、勉強にはなる。早く健康を取り戻してまたステージに立とう。そう奮起しながら観入っていた。

終演後の打ち上げパーティー。これは、またにぎやかなのだ。役者さん、バンドマン、ダンシングチーム、スタッフ。自分も当然参加した。

俳優の今井健二さんが声をかけてくれた。「テラちゃん、病気は大丈夫なの。心配してたんだよ」大女優の白木万理さんも「テラモトさん大

丈夫。無理はしないでね」と。そのほかバンドのメンバーも、皆、声をかけてくれた。だいたい元気をいただいた。長年同じ釜のめしを喰ってきた仲間とはありがたいものだ、あらためて感謝した。

北島一座には、他のタレントさんのところにはない、温かい和気藹々がある、そう芸能関係者には知れ渡っている。オヤジさんに励まされ、また病院へ戻つての闘病生活。十月中旬に退院となったが、治ったわけではない。血圧も不安定なまま様子を見ることとなった。それでも、通院しながら地方公演の舞台に立てるようにになっていた。

やがて二〇〇二年の新年を迎えた一月十八日、埼玉県川口市で初仕事のステージ。昼の部のステージで少し調子が悪かった。そして休憩時間にはやはり、倒れた。救急車で運ばれて、一週間の安静。

退院後、急いで高知に戻った時、妻の父は危篤状態にあった。義父は空港から駆けつけた私にかすかに話してくれ、その翌日旅立っていった。入院が長引いていた。仕事の決まりをつけなくてはと、外泊の許可を

もらって、岡山に公演に来ていたオヤジさんに妻と逢いに行つた。控え室では三人だけで話が出来た。一時間ぐらいい話してくれた。「しばらく現場を離れたいと思います」そう切り出した。

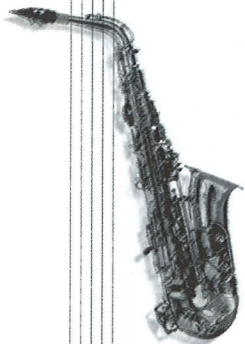
「俺もお前もこの道(芸道)しか生きる道を知らんのだから、がんばって治せ! そしたらまた、新しい道が拓けるかもしれないから」オヤジさんはそう言った。さらに、「俺からは、離れるなよ」とも言ってくれた。胸が熱くなった。やはりこの人は天下の大御所だ、とあらためて強く思った。

オヤジさんの言葉に勇気ももらい、後の脳梗塞の手術にはなんの恐怖もなく臨むことができた。

現在、復活の人生を歩んでいる。まさに新しい道が拓けたのだ。テナーサックスでライブ活動をしなから、音楽の道、終わりのない道を進んでゆくのだろうと思う。まだまだ夢の途中である。

天から授かった命は、大事にするだけでなく、大事に使いながら誰かのお役に立ちたい、との願いを胸に、テナーサックスを吹き続けている。

(つらゆとびい)

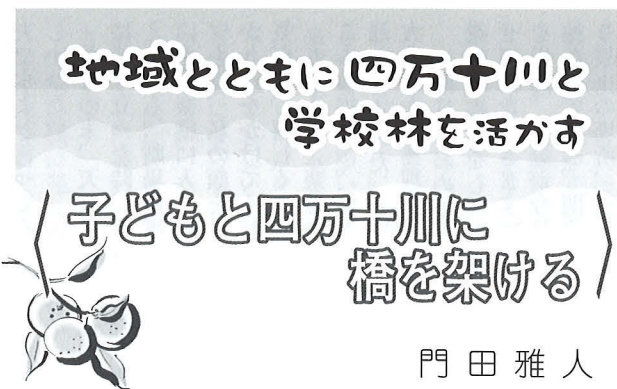


四万十川が清流として全国的に有名なことは知られています。しかし、四万十川で遊ぶ子ども姿を見ない。四万十川で魚を捕ったことがない。四万十川が汚れて、ウナギや鮎の数が減っている。四万十川で若者がおぼれた。など、四万十川にとつて残念な話題や事故が取りあげられるのも現状です。他方、都会には美術館や図書館、映画館、音楽ホールなど様々な文化施設があり、それらの恩恵に与かることができます。身近に溢れる自然豊かな地域で、子どもたちが四万十川をはじめとして、豊かな自然と関わる体験ができないとしたら、これ以上の残念はないと私は危機感を持っていました。

米奥小学校は、県道の対岸にあり、四万十川へは一分もあればたどり着きます。ただし、二〇〇三年に私が赴任した当時は、孟宗竹がはびこり対岸からは校舎が遮られていました。米奥地域に土地勘がなかった私は、奥にある松葉川温泉方面にかなり行き過ぎてから引き返したことを思い出します。別の視点で考えてみると、校舎にいる子どもたちにとつても、四万十川との関係を竹藪に遮られていたことになりません。

まず、竹藪を整備することから始めました。約三分の一をシルバー人「ありき」なのです。私が本校に赴任してきた当時の六年生たちは元氣者でした。バケツの中に入れられたカニと例えると雰囲気は伝わるとは思います。彼らは遊びの天才でもありません。学校と四万十川の間にある竹藪に秘密基地を設営して連日休み時間に通い詰めました。ダンボールを運び込み、ベニヤ板で外壁を囲み、色々な物を持ち込んでわくわくする空間を

材センターに依頼して切ってもらいました。その後、林業事務所や「森と緑の会」、NPO団体「朝霧森林倶楽部」などの支援やPTAのお父ちゃんたちの奮闘で見違えるほどの景観になりました。取り組み全体に『橋を架ける』というテーマを設定したのは、①四万十川と子どもたちに橋を架ける、②川を介して子どもたちと保護者や地域の人たちに橋を架ける、③四万十川の上流域と下流域に橋を架ける、そして、④四万十川と学校林を中心とした山に橋を架ける、ことを目指したからでした。

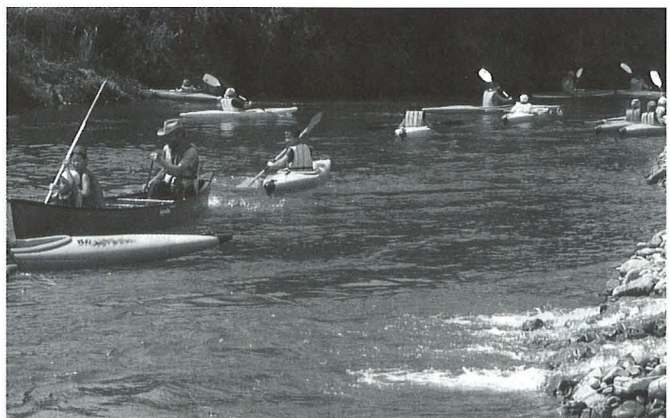


門田 雅人

二〇〇四年、春休み中のある日、私は知人とともに徳島県日和佐へ、著名なカヌーイスト野田知佑さんを訪問しました。米奥小学校が四万十川に近接している立地条件を活かして、地域ぐるみでカヌー体験に取り組みたいと考えてのことでした。野田さんは、四万十川をこよなく愛している人だと伝え聞いていたからです。当時の構想は、旧大野見村と旧窪川町そして、旧西土佐村の児童、つまり四万十川流域の学校児童と交流しながら四万十川をカヌーで川下りする企画でした。

素敵な木造一軒家に、アウトドア雑誌や写真誌などで馴染みの若しい野田さんがいて、大型犬も一緒に暮らしていました（これがかの有名なカヌー犬だとわくわくしました）。その後、野田さんの紹介で西土佐村の平塚さんに支援していただくことになりました。平塚さんにも長く関わってもらっています。快適な生活の様子やカヌーを巡る豊富な話題に時を忘れて長居してしまいました。

最初の企画は、かなり欲ばったものでした。①野田さんの体験談の講演、②漁協組合長による川魚の紹介、③学校傍の四万十川でカヌー体験、④夜間には宿泊体験と野田さんの屋外テント訪問、⑤バス移動ののち下



流域西土佐でのカヌー川下り、という内容です。

それから四年が経過するうち、複数の学校との交流を軸に取り組んでいた企画から、保護者と親子で川遊び・カヌー体験を楽しむ企画に変わってきています。

ここまでの記述を見ると川遊びカヌー体験の企画や四万十川との接点は、校長の趣味や独断で展開されたかのように読み取れるかもしれせん。しかし、実は『はじめに子ども

作っていたのです。程なく下級生にも秘密基地遊びは伝染することとなりました。

秘密基地遊びが楽しいことは当然のことでしたが、「すまんけれども秘密基地遊びを中止してほしい」と私から要請することになりました。ガラスのかけらやトタンの切れ端など、自動車の廃タイヤや機械類の鉄くず、農作業用ビニル等の廃材、校庭から撤去廃棄した大型鉄製遊具などが竹藪の中に所かまわず放置されていました。

現在高校二年生にあたる彼らには、「へこいねや、僕らの時にはツリーハウスもなかったし、カヌーもやってくれなかったのに」と文句を言われます。彼らのおかげで四万十川は米奥小学校にとつて身近な存在になりました。

現在の段階では、①四万十川財団の支援を受けての水質調査と検査、②北ノ川地区と川奥地区の小川と農業用水路で「ごそごそ魚捕り」の活動、③ウナギや鮎など川魚を捕る仕掛けを体験すること、④四万十川でのカヌー練習と親子での川下り体験が主要な柱になっています。

カヌー体験の当日は中学年以上が全員で合宿するのが恒例です。ある年、教職員が宿泊しない案を提起したことがありましたが、保護者・児童の強い意向で合宿は継続されることになりました。「校長先生が替わっても川遊びカヌー体験と合宿は続



けていきたい」との申し入れも受けているところです。保護者以外の支援者も例年三十名以上、継続して定着した伝統の取り組みになっています。

今年の取り組みでは、子どもたちがウナギ地獄の仕掛けや延縄の仕掛けを、地域の名人に手紙を書いて教

のでウナギは捕れずに大ナマズを二匹捕獲)。また、二班に分かれて実施した小川でのごそごそ魚捕りには、二人のお父さんが師匠役を買って出てくださいました(童心のガキ大将に返って一番ムキになって魚を追っかけていただけだったとの評価も)。昨年かなり本気になって網で小魚を追っかけていたカヌー師匠の野田さんは、今年は徳島の「川ガキ学校」の日程と重複したため不参加でしたが、平塚師匠指導のもと四万十川を四キロにわたってカヌーで下りきりました。

低学年は二人艇で、中・高学年および保護者・教職員は一人艇でゆったりと楽しみながら下りました。女性教頭は何度も岸辺にカヌーを突っ込んだそうですが、子どもたちが傍らをすました顔で通り過ぎていったと、本当に楽しそうに失敗談を語ってくれました。

着衣水泳体験や壱斗俵沈下橋から四万十川に飛び込むたくましさ、カヌーコースを歩いて踏破することなどを通して水や川の怖さも心に留めて、川遊びカヌー体験で積極的に四万十川と関わりを強めてきている子どもたちが頼もしく思えます。

かどたまさと
四万十町立米奥小学校校長



高知県の課題

— 社会経済の側面から考える (3) —



高知市の都市格としての街路市

福田善乙

都市格としての街路市

二〇〇八年になって、高知市は春野町と合併し、人口が三十五万人となった。高知市は面積では四・四％を占めるにすぎないが、人口では高知県人口の四四％を占めることになり、高知市の動向が高知県の行く末を決めるようになっていく。

それでは、高知市はどんな都市づくりをする必要があるのか。私は高知市の品格・風格をどのように位置づけるのが大切になっていると考えている。

人間にはそれぞれの人格があるよ

うに、都市にもそれぞれの都市格がある。それは都市の個性や特徴を表すものであり、その都市の品格・風格を示すものである。

この高知市の都市格をどのように考えたらいのか。高知市には高知城や桂浜・龍馬像・太平洋、五台山・牧野植物園、中心市街地のシンボルとしてのはりまや橋、自由民権記念館・図書館、市民の足としての路面電車、よさこい踊り・祭りなどたくさんあるように思える。しかし、私はあえて日曜市をはじめとする街路市を高知市の都市格の中核の一つに据えたいと考える。それはなぜか。

街路市の位置

第一に、高知市のまちづくりが、高知城を中心として発展してきた歴史的過程がある。その高知城を囲む形で街路市が開設されてきたのであり、それが他の都市にない高知市の特徴として知らしきとされているからである。

第二に、街路市の代表である日曜市は三百年以上の歴史があり、かつ高知城から東へ一・三キロメートルに五百店が出店する。規模でいえば日本一大きな市であることである。

また、出店している業種や品物が多種多様なことである。野菜類などの農産物はもちろん、果物・餅やまんじゅう・寿司などの農産加工物、包丁などの金物、古着や骨董品、衣料、石や亀、金魚、花や植木などを売っている。「日曜市へ行けばなんでもある」といわれるほど、品物が豊富である。

第三に、街路市は日・火・水・木・金と五日開かれ、しかも全国的に珍しい「日の出から日没まで」の「終日市」であることである。終日市は新潟県と高知県ぐらいの特徴であろう。

そして、二〇〇八年三月高知海岸壁に「港の土曜日・高知オーガニッ

クマーケット」が始まり、月曜日以外の毎日どこかで「市」が開かれるようになった。まさに、高知は「市の国」なのである。

第四に、街路市は本来的には生活市であり、市民の交流の場となっていることである。日曜市も生活市を基本とし、それがまるごと観光資源となっている。そこでは土佐弁が飛び交い、出店者の個性も加わり、土佐の文化や伝統、歴史を学ぶ場となっている。

この街路市は高知県下の小・中・高・大学ばかりでなく県外の学校の体験学習・フィールドワークの場ともなっており、教育の場ともなっているのである。

街路市の役割

第五に、街路市は経済的に大きな役割を果たしている。日曜市だけでも年間八〇万人の来客があり、年間購入額は一六億円である。わずかに十日で一店当たり約三・四万円の販売額である。経済波及効果は全体で一・二億円にのぼっている。これは同時に、女性や高齢者に雇用の場・仕事の場を提供している。

また、この街路市をモデルとして

連携としての街路市

広がった農産物等直販所は二〇〇六年に全県下で百四十一店舗、売上高七〇億円にのぼっている。高知市内だけでも十九店舗、一一億円に達している。この高知県下の直販所は一九九五年に六十三店舗、一七億円だったから、二〇〇六年には店舗で二・二倍、売上高で四・〇倍になっているのである。

第六に、街路市は直接販売⇨産直方式である。生産者と消費者のひととの信頼にもとづく交流のなかで経済活動が成り立っており、食料品の偽装表示などモラル・ハザード(倫理観の欠如)がある折、これからの経済活動の原点を示している。

「儲け」という言葉は「人」と「者」の間に「言」があるように、人と人との信頼関係のなかに「儲け」があるということであり、別の読み方をすれば、「信」頼できる「者」こそが「儲け」を得ることができるのである。

第七に、高知市の街路市へは高知市外の十四市町村・百三十九人が出店しており、高知市の街路市から高知県の街路市へ進化している。これは都市と農村の交流・連携のモデルを示しており、高知市が農山漁村地域と結びあう姿を提示している。

第八に、街路市は周辺の商店街と共存共栄関係になっており、街路市の発展が商店街の発展にもなっていることである。高知は海の国なのに、なぜ日曜市に生魚がなくて塩干物だけなのか、という質問がある。これは衛生上の問題もあるが、近くの大橋通り商店街が海産物中心の商店街であり、商店街と共存するために出店を制約したことによる。

また、商店街の中に「市」が生まれている。はりまや橋商店街には「金曜市」はりまや市が開かれているし、京町商店街中心に「おかみさん市」が開かれている。

第九に、街路市の発展のために、行政の役割が大きいことである。高知市の商工観光部には街路市係の職員が三人いる。自治体に街路市係がいるのは全国的に珍しく、高知市ぐ

らいである。しかし、これからは街路市が自立していく方向でのサポートのあり方を考えていくことが必要になる。

第十に、街路市は高知城を囲む形で開設されているが、特に日曜市は「城の見える市」として、風景が様になっていることである。高知市の景観としてもすぐれた絵になっている。この景観としてすぐれていることは大切なことであり、高知市の都市格を語る場合、大きな意味を持つものである。

街路市の課題

この高知市の都市格の柱となる街路市には大きな課題がある。いまのままでは衰退していく可能性がある。

一 つ目は、高知市の街路市だけではなく日本全体のことでもあるが、後継者問題をどうするかということである。街路市を支えている人は、二〇〇六年段階で二〇・三〇代一・七％、四〇・五〇代三二・九％、六〇・七〇代五一・七％、八〇・九〇代九・三％であり、平均年齢六六歳となつて高齢化が進んでいる。それゆえ、新しい世代の育成が大切になっている。この場合、これまでの血

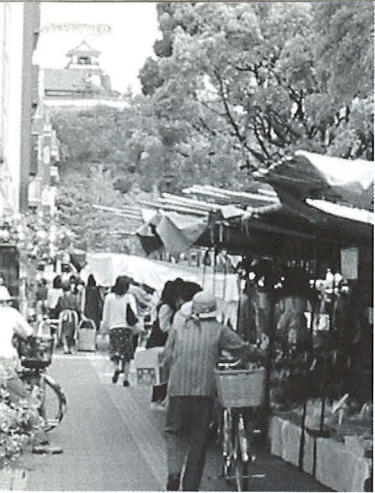
縁の育成から地縁の育成へ、高知県全体で育成することが求められていることである。

二 つ目は、これからの街路市のあり方について検討していくことが求められることである。これまで良い点は引き継ぎながら、新しい時代にふさわしい「市」とはなにかを市民・県民と協力しながら検討していくことである。

いま、日本全体に価値観の転換が求められているとき、新しい価値観にもとづき「市」の第二の創業を進める時期である。街路市も質的に高めていく時代になっており、市を担っている人達も新しい時代に合うように変化していくことが求められる。そのためにも、いまの「市」はどのようなのか、これからの「市」はどうあるべきか、を市民とともに勉強会を開くことが大切である。それが、これからの街路市が高知市の都市格としてあるために、必要なことである。

なお、街路市・日曜市の詳細については四銀キャピタルリサーチ「四銀経営情報」(第九九号、二〇〇七年十一月)の拙稿を参照していただければありがたい。

ふくだよしお
高知短期大学名誉教授



言葉

の現場から⑫

高知の若者が発するロック iii

OK 電算機

これまで二回にわたって、高知の若者たちの「希望の歌」を紹介してきた。最後に、これまでとは異なる顔を持った彼、彼女たちのロックを伝えようと思う。どうしようもない、叫びを。

県内大学の男子学生、ハナクソ。一人でアコースティックギターをかき鳴らし、絶唱するスタイルの彼の歌「勝手にしやがれ」。

僕らのことなど興味なくせに世界のことなど興味なくせにどうせお前の求めてるものは汚れた金にまみれた生活

お前がどれだけ叫んでみてもお前がどれだけ求めてみても世界の混沌は相も変わらず僕の悲しみが癒えることはない

勝手に、勝手にしやがれ
勝手に、勝手にしやがれ

勝手に、勝手にさらせ

もう一曲、ハナクソの歌。「自決しろ」より。

死にたくなっても一人で決められず
生きたくなくても一人で決められず
パソコンに向かい検索してるのさ

自分の答えを検索してるのさ
おい、若者よ
そんなんでいいのかい？

彼は「死ぬ」と言っているのではない。「自決しろ」とは「自分で決める」という、いらだちだ。人の考えをそっくりもらってくるのではなく、自分で考えろ、という叫びだ。同じく、アコースティックギター一本で時に静かに、時にめいっぱいの叫びを聴かせてくれる二十代半ばの青年、オビト。小中学校と不登

校だった彼が、高校に通い、そこで出会った友人の書いた詞に感銘を受け、曲を付けた歌「グッバイ」。

どうしてこんなに苦しいのですか
どうしてこんなにつらいのですか
あなたが消えてくれたらいいのに
あなたが死んでくれたらいいのに

あなたのいる この世界から
あなたのいない この世界へ

バカに育ててくれてありがとう
クズに育ててくれてありがとう
立派な大人になってなりたくない
立派な大人なんてありはしない

親と子のどうしようもない不和の歌、である。

これらの歌のメロディーはいずれ



も哀感を含んだもので、それだけで切なくなる。そこに追い打ちを掛ける歌詞。純粹に共感する言葉もあれば、「そんなこと歌わないでくれよ」と思う言葉もある。アンビバレンツな思い。ただ、その中に、消すことのできない強烈な存在感を持った「問い」が姿を現す。

彼らに、そう歌わせているものは何か？

答えを、わたしたち大人は持っているか。パソコンで検索したものはなく、わたしたち自身の考えを、きちんと伝えることができるか。

◆

高知の若者たちのロック。それは大人たちの知らない場所で大音量で鳴らされ、歌われていた。世界に届くかどうかなどという結果を求めずに。が、そんな「真つすぐ」な彼、彼女たちにもいつか、いろんなもののがんじがらめになる日が訪れる。ロックを手放す人も出てこよう。それでも…。

大人たちの世界とはまったく別の場所—ワイルドサイドを歩く若者は、これから先もこの高知に間違いなく現れ続ける。打算なき反抗。無垢なるロック。それはいつの時代も若者の特権なのだから。

(おーけーでんさんき／新聞記者)

高知のギャラリー⑧

タマリン館

玉造 義隆・久美

タマリン館は二〇〇三(平成十五)年三月に、南国市立田の県道沿いに遺族である私共両親が遺作を展示するために設立しました。今年が開館してから六年になります。タマリンのお墓は、香美市土佐山田町京田にあり、ここから車で約五分の所です。ペンネーム・漫画家タマリン(本名玉造義隆)は、高知市に生まれて成人式も同市へ出席しました。二十一歳で南国市へ転居してから五年後、一九九八(平成十)年十一月十八日に、県道交差点の横断歩道を渡り終えた時に、暴走してきた貨物トラックに跳ね飛ばされて二十六歳で死亡しました。母校である岡豊高校のすぐ近くでした。



人はいつも一緒でした。小さい頃は現代美術の制作をしていた父親の義隆が作品制作や会場で搬入展示する時など、いつも側にいて、黙って眺めていました。大きくなるにつれて制作展示の手伝いをするようになりましたが、自分自身では描いたりしたことが全然なかったのです。それが高校卒業と同時に突然制作を始め、死去するまでの約八年間で、一万点

近くを遺したのですから驚きです。それもほとんどが未発表の作品でしたので、私共両親は、その遺作を月替わりでテーマ別に整理しながら、企画展を開催してきました。

タレントや野球選手の似顔絵、高知新聞に投稿した一コマや四コマ漫画、高知県展、市展、二科展等の公募展のグラフィックデザイン部門に出品したパネル張りのポスター、『週刊朝日』連載の「山藤章二の似顔絵塾」に入選した作品、キャンパスに描いた似顔絵や絵画作品、スケ

ッチブックに描かれた鉛筆デッサンは百冊にもほり、そしてギザギザにデフォルメされた夥しい数の顔の習作など：遺作は多岐にわたります。『文化高知』の表紙も一九九六年の十一月号(No.74)を描かせてもらっています。開館してから今日まで、企画展を五十回ほど開催しました。まだまだ整理半ばで、終わりのない旅をしているようです。

親にとつて子供は「あかり」のような存在なのです。私たちはその「あかり」をある日突然、暴走トラックによって消されてしまい、真っ黒な穴の中に夫婦だけ閉じ込められたような生活を何年間も送りました。そして、やっとできたのがタマリン館です。私たちにとつてタマリン館は心の「あかり」なのです。この「あかり」を私たち両親の命が続く限り灯し続け、命の尊さを伝えていきたいと思いで、作品整理と展示を続けています。そして、息子タマリンが、『僕は、新しいタイプの漫画家になりたい』と、言っていたのを忘れることができません。

タマリン館は記念館の姿勢で運営していますから、タマリンの遺作展示を主旨としています。年に数回は、タマリンと縁のある作家の個展やグループ展、地域交流目的の展覧会、



タマリン館
南国市立田一三二五二一〇
電話〇八八—八〇四—六五一—



高知市文化プラザ かるぽーと

9月～10月の事業から

ホリカワアートミーティング2008AUTUMN

▶ 9月21日(日) 通算4回目となるアートイベント「ホリカワアートミーティング」を開催しました。

過去最多の出店数となったアートフリーマーケット「かるぼいち」をはじめ、アコースティックコンサートや和紙を使ったかざぐるま作りワークショップなど、今回も「誰もが気軽にアートを楽しめる空間」をテーマに多彩なプログラムを実施しました。

当日は昼からあいにくの雨が降り、前広場で予定していた会場も変更になりましたが、それにもかかわらず多くのお客様で賑わいを見せました。

イベント終了後にはたくさんの方のブログなどで「ホリカワアートミーティング」の感想がアップされ、イベント自体が少しずつ成長していることを感じました。



▶ 10月30日(木) 3階ガレリア

市民による音楽を通じた国際交流を目的に結成された「国際的な音楽交流を中心に高知を楽しくするプロジェクト」による初めての取り組みとして、「世界の音楽と食」をテーマにしたイベント「ワールドミュージックナイト」を開催しました。



オーストラリアの民俗楽器、ディジュリドゥの演奏者、コスターレツムさん、高知のブルグラスバンド、「ロンギング・フォー・ザ・サウスランド」、ニューヨークを拠点に活動するフォークローレバンド「WAYNO」の3組が演奏。

プロジェクトのメンバーが中心になって準備した、スウェーデンスープやチュニジアのブリックなど、9カ国の料理ブースが並びました。

ライブ会場になったガレリアは満員で、観客は世界の料理と音楽を満喫していました。



国際的な音楽交流を中心に高知を楽しくするプロジェクト

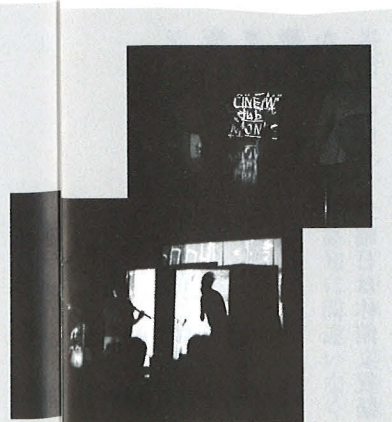
2007年のJAZZCHOR FREIBURG高知公演の実行委員会メンバーを中心に結成され始めたプロジェクト。継続した国際的な音楽交流をしながら、高知を楽しくしようといういろいろなLIVE等を企画。自分たちも楽しみながら活動中。

ホリカワアートミーティング関連事業

CINEMA dub MONKS ～シネマ ダブ モンクス～ LIVE

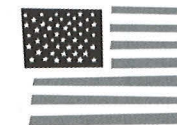
▶ 9月20日(土) 小ホール

フルート・ハーモニカ奏者の曾我大穂さん、ウッドベースのガンジー西垣さんの2人による演奏は、サンブラーやたくさんの楽器を使いながらその場でさまざまな音を重ねる手法で、2人の演奏とは思えない不思議な厚みを感じました。またステージ後方にスクリーンを構え、絵画や町の風景などの映像を投影しながらライブは進行し、まるで「1本の映画のような」空間を創り上げていきました。



World Music Night vol.1

ワールドミュージックナイト
～世界の音楽と料理を楽しむ夕べ～





景観考

タケムラナオヤ

東西南北

高知の人間は、「あこを北へ、そこで東へ」とすぐに東西南北で道案内をする。だけど、県外のお客さんにこんなふうの説明すると、まず理解されない。「ですから東はどっちなんですか」と聞かれてしまう▼高知の街は地形が単純で、山は必ず北にあり海は必ず南にある。川も東西に流れるものであって南北には流れない。たぶん、江戸時代にこの街が開かれてからずっと続く感覚だろう▼その一方で、この街で目印となるものはずいぶん減った。建物は似たようなものばかりで、どこからでも見えたお城が見える場所は減り、バイパスを走れば他所の街とひとつも変わらない風景が続く▼「道案内の基準が東西南北」。高知らしくあると同時に、街の顔の無さを示すものでもあり、ちょっと複雑だ▼もっとも、道案内をする機会も、いつの間にかずいぶん減ってしまったのだが。

風伯

料理教室へ行く

いに頼むと、あっさり娘役を務めてくれた。教室では包丁の使い方から料理の下ごしらえや微妙な味付けの塩梅まで、懇切丁寧に教えてもらえた。ふだんはなるべく手間のかからないやりかたをしていたので、その下ごしらえの丁寧さは新鮮であったし、楽しくもあった。料理というのはなんとワクワクする作業なのかと改

十月五日から五回シリーズで始まった「親子で学ぼう土佐の伝統食」という料理教室を覗いた。ふだん雑誌や本をみながら自分の食べるものを自分流でつくって、もっと美味しくつくりたい、と思っていたからとりあえず覗いてみようと思ったわけである。問題は「親子」の子どもをどうするかであったが、知り合

めて思えた。それにしても、すくなくとも私などの世代は料理は女性がするものと、何の疑問もなく思ってきた。あの「Tancun」という雑誌が創刊されて、はや十八年経つたのだから、世代を問わなければ男子も厨房に入るようになったのだろう。とはいえ、いわゆる団塊の世代以上となると、どれほどの男たちが家庭で料理をするのだろう。望んでそうなったわけではないが、ひとり暮らしをしていると、そうそう外食もできず、食材を買ってきて料理のまねごとを始めた。すると、次第に料理の面白さがわかってくるのである。毎日義務となるとたいへんだろうが、こんな楽しいことを女性だけに任せおいてはならない。料理は奥が深いし、探求し甲斐もある。私はやむを得ず料理を始めて目覚めたのだが、つくった料理を食べてもらえる人がいればなお楽しいこと請け合いです。が……。

(霖)

文化高知

定期購読のご案内 賛助会員募集中!!



賛助会費
2,000円
(年額)

財団法人 高知市文化振興事業団の
機関誌「文化高知」を
年6回お手元に。

お申し込みは・・・
事業団にお電話でどうぞ。
次号に郵便振替の用紙を
同封してお届けいたします。

お申し込み・お問い合わせ
(財)高知市文化振興事業団企画事業課
Tel 088-883-5071
毎週月曜休業(祝休日は除く)

今号の表紙

「白光浴」

越智明美

ある日燦々と降りそそぐ光を浴びて、穏やかな中にも凜と咲くアジサイに出会った。私もこの花のように希望の光に向かって、まっすぐ伸びていきたいと思いながら制作した。気づくといつしか、そのアジサイの一つひとつが、今勤務している中学校の生徒たちの笑顔に重なり、彼らにエールをおくる気持ちで丹念に仕上げた。

(おちあけみ/中学校教諭)



高知を撮る

第24回写真コンテスト入賞作品

わらべ

(昭和55年 南国市)

近藤 輝代彦

久枝付近の『座り地藏さん』では、子どもたちがよく遊んでいた。空港周辺の土地の移り変わりによって、その姿もいつともなく見られなくなった。

「米大統領選」

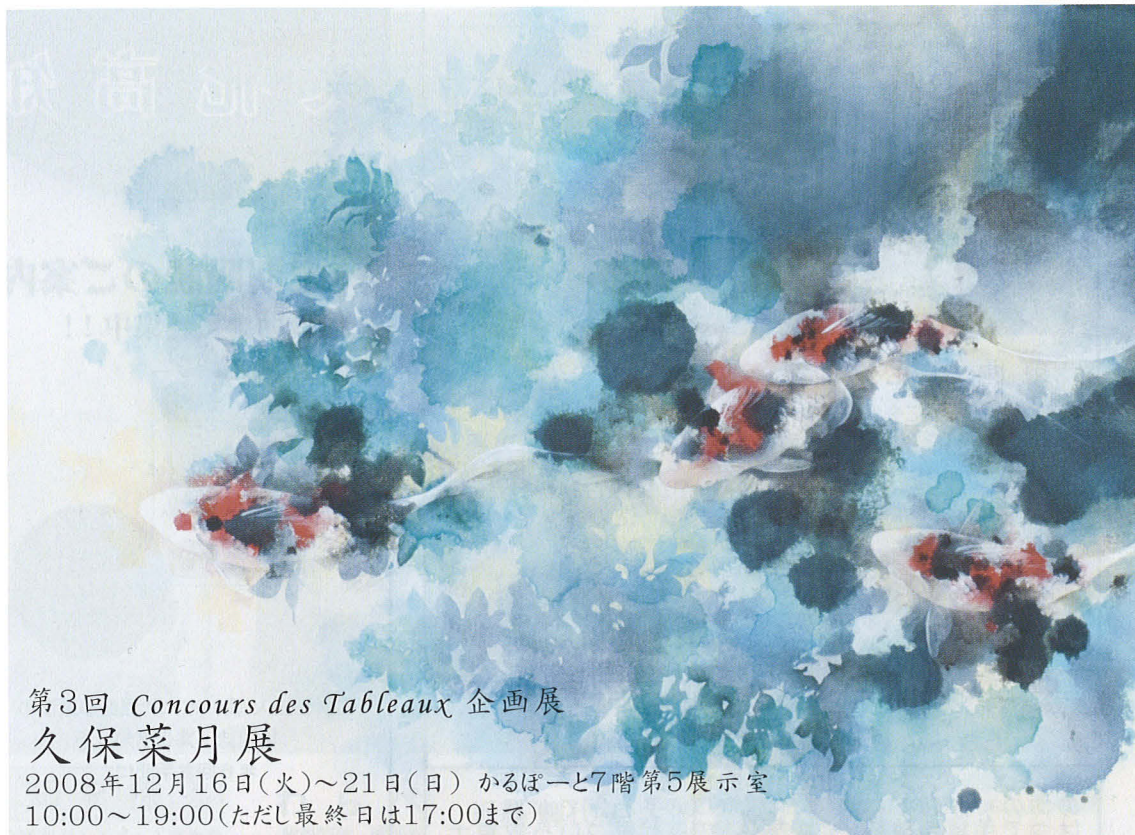
風俗歳時記



今回の米大統領選は「初ものつくし」である。まずは民主党の候補者選出。黒人のオバマか、女性のヒラリーか、いずれが候補になっても史上初だった。ちなみに歴代43人の大統領のうちWASP(白人、アングロ・サクソン系、プロテスタント)でないのは、アイルランド系でカトリックのケネディの一人だけである。かつて、六〇年代のキング牧師(民主)、九〇年代末ハウエル前国務長官(共和)らが有力候補者として名前が挙がったが人種の壁は厚く、「彼らが黒人でなければ間違いなく大統領候補になっただろう」と言われた。オバマのスローガンではないが、大きな変化の胎動を感じる。他方、共和党の候補マケインは七二歳。勝利すれば就任時最高齢の大統領になる。また、民主党では九八四年選挙でモデルの副大統領候補に女性でイタリア系のフエーロを指名したのが史上初であったが、ペイリンは共和党としては初の女性副大統領候補である。

とここで、副大統領は大統領を補に候補者選挙から二般投票にいたるまで約二年をかけるこの仕組みは、たとえそれがメディアを使ったイメージ戦略に大きく左右される要素を持つとはいえず、民意を反映させるという点ではわが国よりはるかに優れたものといえることができるかもしれない。(江西 縁)

佐し、上院では議長を務めるが、それだけではない。「大統領がその地位を免ぜられたとき、または死亡もしくは辞任したときには、副大統領が大統領になる(憲法修正第25条)のである。そういう意味では、副大統領候補も「大統領としての」資質、能力を問われる。任期途中の副大統領が大統領になったのは、暗殺されたリンカーンやケネディの後を引き継いだケースを含め過去八回ある。したがって、副大統領候補も注目を浴びざるをえない。十一月四日の一般投票まで一カ月を切った(原稿執筆時)。他方わが国では衆議院の解散・総選挙が取りざたされている。国のトップを選ぶの



第3回 *Concours des Tableaux* 企画展
久保菜月展

2008年12月16日(火)～21日(日) かるぽーと7階第5展示室
10:00～19:00(ただし最終日は17:00まで)

第4回美術作品コンクール

CONCOURS des Tableaux

高知市文化プラザでは、若手の美術作家を支援するために、美術作品コンクールを開催します。これは、芸術文化を創造する人材を積極的に支援・育成することを目的とする事業です。フレッシュな感性、情熱あふれる作品をお待ちしています。

●審査員

榎木野衣氏
(美術評論家・多摩美術大学美術学部准教授)

●対象

平面作品(壁にかけられるもの)。書、写真は対象外。

●資格

県内在住あるいは県出身者で18歳以上35歳未満の個人(平成21年4月1日現在)。

●規格 260cm×260cm(枠・額を含む)以内の作品2点まで出品可(未発表作品に限る)。

枠装、額装あるいは容易にワイヤー・フック等で壁面展示可能なもの(ガラス・アクリルの使用不可)。出品料無料。

※1) 展示作品の天災、不可抗力、いたづら等による損害について主催者は責任を負えません。

※2) 作品に水、生花等生ものの使用を禁止します。

※3) 枠装、額装などに不備のある作品は、受付できない場合があります。

※4) 展示後の作品は、加筆、撤去、配置替えを行わないことを原則にします。

●日程

作品搬入：1月17日(土)・18日(日)9:00～17:00

一般鑑賞：1月20日(火)～25日(日)

高知市文化プラザかるぽーと 第1・第2展示室

公開審査：1月25日(日)14:00～16:00(表彰式16:00～)

●賞

最優秀作1点賞金30万円、優秀作2点賞金各5万円を贈呈。また、最優秀賞受賞アーティストは、受賞後概ね1年以内に市民ギャラリーにて、(財)高知市文化振興事業団主催の企画展を開催することができるものとします。

●応募方法

専用の申込用紙(高知市文化プラザをはじめ、県内文化施設にて配布中。またホームページからダウンロード可)に必要事項を記入の上、作品の写真(制作中のものでも可)を添付し、1月7日(水)17:00までにお申し込み下さい(郵送・持参いづれも可)。これ以降も搬入日まで受付は行いますが、その場合には展示場所・目録掲載等に十分配慮できない場合があります。

●お申し込み・お問い合わせ先

〒780-8529 高知市九反田2-1

(財)高知市文化振興事業団「美術作品コンクール」係
TEL 088-883-5071